

諸取引を媒介する通貨概念と吉田暁氏の「預金通貨」論 ——現代通貨論研究(2)——

A currency concept to transmit real transactions
and the understanding of “deposit as currency” by Akira YOSHIDA

吉 川 顯 磨
KIKKAWA Akimaro

【概 要】

資本主義的生産様式の下における価値および剰余価値の生産・流通の過程において、貨幣は諸取引を媒介する流通手段、すなわち通貨としての機能を果たす。この通貨の媒介なしに取引が行われることはない。吉田暁氏は、決済システムの存在によって預金の振替・決済が行われることを前提に、小切手や約束手形、そして現金さえも、預金通貨を振替・移転させる単なる手段であるとし、もっぱら預金を通貨であると考え。実際には、氏は、銀行が貸出を通じて創造する預金を預金通貨とし、金融システムからの「漏れ」だとする現金通貨を合わせて通貨と考える。そしてこの預金通貨および現金通貨が通貨のすべてであると解している。現実資本の運動を無視し、金融システム内の貨幣資本の動きにのみ目を奪われてそのバランスだけで説明する吉田氏のこの顛倒的な論理に対し、銀行組織—金融システムから区別された流通の世界では、企業自身がすでに商業信用によって、商品の売上代金としてその価値を移転させた貨幣資本を、商業手形＝約束手形の形態で保有しているのである。そこでは手形が通貨機能を果たしていること、市場の現場で取引を直接媒介しているのは現金、小切手、手形でありまさにそれこそが流通手段＝通貨であること、銀行信用が生み出す預金形態での貨幣資本は、流通の必要によって銀行券の引き出しや小切手の使用によって通貨として使用されるが、銀行組織の外の流通の世界においても、商業信用が生み出す約束手形も、それ自体取引された商品価値の移転した形態として、そこに貨幣資本を体現しているがゆえに通貨の機能を果たしていること、を論証する。

【キーワード】

通貨、現金通貨、預金通貨、手形、小切手、商業信用、銀行信用

【目 次】

はじめに

- 1 取引を媒介する通貨としての手形と商業信用
- 2 「貸出によって供給され、返済によって消滅する預金」について
- 3 銀行預金の振替・移転が意味するもの
- 4 通貨の概念
- 5 小切手の利用と商業手形の利用

おわりに

はじめに

前稿ⁱで取り上げた吉田暁氏の議論を本稿でもその対象として取り上げる。氏が自著ⁱⁱで取り上げたのは通貨範疇それ自体の検討ではない。吉田氏が取り上げるのは、預金を通貨とすると氏が考える「決済システム」の存在と、こ

れを基礎に「銀行貸出」によって創造される「預金通貨」、返済による預金の消滅といった金融システム内の動きである。氏が本書で主張しているのは、「預金の振替を処理する手形交換所や為替のシステム」を内容とする決済システム＝ペイメントシステムの存在によって預金は預金通貨となり、その預金の創造は銀行が貸出を通じて行うのであ

て、すべての経済取引は銀行の信用創造によって生み出された預金通貨の振替の形で行われる。銀行信用が創り出す預金こそが通貨なのであり、現金も手形も小切手もすべてこの預金の振替・移転を行う手段に過ぎない、というのである。また吉田暁氏は次のようにも言う。「貸付に当たって創出された預金は取引を媒介しつつ基本的には消滅することがない（マネーサプライの増加）」ⁱⁱ。自ら創出した預金は流出し、役割を果たした上で銀行組織全体のどこかに還流してくるが、「創出された預金はペイメントの手段として使用され持ち手をかえる。そして最後には預金が貸出の原資としてバランスする」のだという。またこうも言う。「現金を小切手、手形等と並列するのは、一見奇異かもしれない。預金通貨は現金を基礎に創出される。しかし、いったん形成された預金通貨の立場から逆に見れば、現金もまた預金通貨を移転させる手段だと考えてよい。」ⁱⁱⁱ。

また、吉田氏の議論の全体構造を支える認識である、「現代の貨幣つまり現金通貨と預金通貨はいずれも信用貨幣であり、銀行の銀行としての中央銀行を頂点とする銀行システムを通じて、貸出しによって供給され返済によって消滅する、と言う形で国民経済に対して供給される。」^{iv}と言う点の根本的な問題点についてはすでに前稿で批判検討しておいた。氏の議論の特徴は、捉えている経済的、金融的諸関係が金融実務者的、顛倒的理解であり、かつ極めて無概念的であることである。流通の世界での現実資本の運動、すなわち実態経済との関連はほとんど無視されている。すでに前稿において、氏の議論の骨格についての批判的な検討は行ったが、本稿ではさらに、吉田氏が、金融システムの内部から一步も出ず、銀行活動や金融システムを一国経済の総体のなかで位置づけようとし、顛倒的理解を取り上げ、流通世界における貨幣の通貨としての独自の役割と運動を取り上げて通貨概念の明確化を図る。

1 取引を媒介する通貨としての手形と商業信用

先に吉田暁氏は、「現代の貨幣つまり現金通貨と預金通貨は——，銀行の銀行としての中央銀行を頂点とする銀行システムを通じて、貸出しによって供給され返済によって消滅する」と主張していた^v。この説明自体は、現金と預金の発生そのものに関する説明であって、それ以上のものではない。預金というものがそれ自体銀行の貸出行動によって生まれ、返済を通じて消滅するとしており、別の箇所で、現金はそうにして生まれた預金はその通貨機能を十全に果たすことができない部分、金融機構から実体経済に漏れた部分、すなわち「漏れ」に過ぎないとしていたものである。

ここで氏が言及しているのは預金・現金の発生と消滅の説明に過ぎないとは言え（説明内容自体も妥当なものではない）、そこからさらに問われるのは、吉田氏が、銀行が貸出しによって創造するその預金が、それ自体決済システムの存在によって、実体経済における商取引の媒介を担うまさに「通貨」になるのだ、としている点である。したがって、先に見たとおり、現金や小切手、手形などの本来の通貨は「預金の移転（振替）の手段」に過ぎないとの理解であり、決してそれ自体が「通貨」だとは考えていないことである。

商品の買い（購買）の総和としての社会的需要は、それ自体、購買力を代表するものとしての貨幣ないし貨幣資本の存在によって裏付けられていなければならない。そのような貨幣の供給が現代においては、結局のところ、最終的に銀行の信用制度すなわち銀行システム（貨幣供給機構）の存在に依拠していることはそれ自体議論の余地はない。

とはいえ、商品の売買取引そのものは、現実の貨幣の存在によって裏付けられることがなくとも、銀行には直接媒介されない企業間の信用（商業信用）によって、すなわち将来における支払い約束（約束手形）の発行流通によっても拡大し、それ自体裏書流通の形態を含め実体経済取引の相当割合が、銀行システムからは相対的に独立して企業が自ら創り出す流通手段（通貨）によって媒介され価格実現が図られるのである。それは銀行の独自の信用行為（銀行信用）によって創り出される貨幣（預金額）への依存の大幅な節減を可能にしている。流通世界における商取引は、それを媒介する取引手段は何であれ、最終的に銀行システムの存在を前提した相殺・振替の決済システムによって支持されているとはいえ、現実の商取引は預金の振替によるものとは別に商業世界における信用とこれを担う約束手形の発行と流通（裏書流通）によっても媒介されている、ということを見逃すわけにはいかないのである。

ちなみに、手形の裏書流通が現実には傾向的に少なくなっているとはいえ、仮にそれが全く行われないうで販売者が受け取った約束手形が直接すべて銀行に持ち込まれて割引に付されると考え、その割引＝買取を通して銀行貸出額が結果として増加するとしても、現実の商取引の大きな部分が商業信用＝手形の発行・流通によって担われている事実は否定できない。事実関係は、商業信用に基づく商取引＝商品売買によって商品価値の手形への価値移転が行われ、その結果としての手形形態における貨幣資本の存在がまずあり、つぎにこの手形の銀行による割引によって銀行貸出の増加とそれに見合う預金額増加がもたらされるが、この割引によって実現するのは、手

形態における貨幣資本の現実の貨幣形態への転化なのである。*

* 手形割引については若干の説明を加えておく。K・マルクスは『資本論』（マルクス＝エンゲルス全集版、大月書店・国民文庫⑦）第三部第5編第26章（p200.）において、「普通の事業家が手形を割引させるのは、自分の資本の貨幣形態を先取りすることによって再生産過程の流動を保つためである。——割引は、じっさい、ただ、すでに彼の手にある貨幣資本を一つの形態から別の形態に転換することでしかない」としている。また、マルクスの死後、F・エンゲルスは、『資本論』のこの同じ章の編集に際しての書き込みの中で、ロイド・オーヴァーストーンを批判して述べている。「前貸が手形の割引によって与えられるならば、前貸という形態も消えてしまう。そこにあるのは純粋な売買である。手形は裏書によって銀行の所有に移り、そのかわりに貨幣は客の所有に移る。客の方からの返済は問題にならない。／そして、このような場合には資本の前貸などとは全然言えないのである。（客と銀行業者の一引用者）商人どうしのあいだの売買はすべて資本の移転である。」（p207）

2「貸出によって供給され、返済によって消滅する預金」について

「貸出」が「貸付」と「手形割引」を総称したものであることを踏まえても、「預金」の発生がすべて「貸出しによって供給」されると見ること自体、事実の説明として間違っている。銀行システムの内部だけに目を向けて見れば、まずは銀行信用の一形態としての貸付によって預金の設定され、預金の増加がもたらされる。また、手形割引によって手形受取人・持込人の預金口座に預金の設定が行われることも間違いはない。しかし、実態経済における商取引を媒介する手形の発行流通はそれ自体、銀行の決済システムにおいて最終的に決済が行われるが、手形交換に持ち出される手形金額の大部分は相殺によって現実の現金の必要からも免れ、相殺されない残高部分だけが預金振替によって決済されるのである。現実には決済金額は小額であっても、交換に持ち込まれた手形金額の全体が社会全体としての取引金額を増大させ、取引に参加する個々の企業の預金額を全体として増加させている（資本の蓄積の一態様）と見なければならないであろう。

またそれが「返済によって消滅する」とみることの間違いも、前稿ですでに指摘したところであるがこれも明らかであろう。返済によって消滅するのは直接には貸出債権であり、返済の原資としてそれだけの金額の預金額が（返済額分）消滅するに過ぎない。貸出によって当初創り出された預金額はそれ自体「資本の前貸」を意味し

ているのであって、この前貸資本金額はその後、前貸資本の自己増殖を目指す企業の活動を通じて、時間の経過とともに絶えずより大きな経済取引を媒介しながらより大きな預金額を形成していくはずである。当初の借入額としての預金額を超える膨張した預金額の中から月々一定額の返済が行われ、同額の預金額が消滅するとはいえ、返済が完了する時点ではすでにより大きな本源的預金の残高が存在していると考えなければならない。

3 銀行預金の振替・移転が意味するもの

また、商業取引がすべて銀行預金の振替によって行われているという認識は、銀行実務家的立場から経済の運動を高見から顛倒的にみるものであり事実にも反する。むしろ、真実の事態と関係は、実体経済取引そのものの拡大が基礎にあり、これを可能にしている一つの大きな要因が商業信用なのであり、銀行による貸出＝銀行信用は、実体経済に対して自律的、規定的に独自の貨幣額（資本・購買力）を創出する機能を一方で有するとはいえ、銀行信用の基礎を成す商業信用の観点から見れば、銀行貸出＝銀行信用の一部を構成する手形割引そのものが、通貨として機能する手形形態での貨幣資本額が現実の貨幣形態である銀行預金形態に転化するに過ぎず、何よりも商業信用の拡大と経済取引の拡大がこの関係を主導しているのである。かくして、通貨概念は、銀行システムの内部で捉えられるものでは本来なく、現実資本の運動に即して、すなわち商品流通世界内部において捉えられなければならない。「通貨」とは何よりも、市場における実体経済取引を現実的に媒介するものとして理解され把握されるべきものである。その点を抜きに、銀行信用による預金額の増加、したがってマネーサプライの一方的増加が物価上昇・インフレにつながるという経済的関係を貨幣数量説的理解から救い出すこともまたできない。

4 通貨の概念

価格を付されて取引される対象物は、商品として、すべて貨幣を媒介者として取引されるが、その際、「商品流通の媒介者として、貨幣は流通手段という機能をもつ」^{vi}。これは、資本主義的商品社会における一切の商品取引を媒介する貨幣の機能を説明した基本的規定である。貨幣のこの機能は、商品が一方では売りとして現れ他方では買いとして現れ、購買者の用を足し、販売者の提供する商品の価格を実現させながらその持ち手を変え、商品の取引を媒介しながら、次々と買い手から売り手へと自らの場所を移しながら転々と流通＝移動していく。このように商品を売り手から買い手へと絶えず移しながら、自らは買い手から売り手へと移動して出発点から遠ざかっ

て流通していく貨幣、これを「通貨」と呼ぶのである。

マルクスは、『資本論』の中の金属流通（貨幣＝金、銀の流通）を前提とした論理段階において、「商品流通の媒介者として、貨幣は流通手段という機能をもつ」として「貨幣の流通」について述べている。「商品流通によって貨幣に直接与えられる運動形態は、貨幣が絶えず出発点から遠ざかること、貨幣がある商品所持者の手から別の商品所持者の手に進んでいくこと、または貨幣の流通（currency）である。／貨幣の流通は、同じ過程の不断の単調な繰り返しを示している。商品はいつでも売り手の側に立ち、貨幣はいつでも購買手段として買い手の側に立っている。貨幣は商品の価格を実現しながら、商品を売り手から買い手に移し、同時に自分は買い手から売り手へと遠ざかって、また別の商品と同じ過程を繰り返す。」^{vii}。以上の叙述は、指摘したように金属流通を前提したものであるが、貨幣の流通手段機能＝通貨機能を定義したものとして、それを担う諸手段が他のものに代位しても基本的に変わるものではない。

概して通貨は、実際の商取引が行われる市場の現場で、売買の手段として、すなわち「商品流通の媒介者として」^{viii} 実際の機能を果たすものであり、それは本来商品価値に見合う一般的価値物としての「実在の貨幣」すなわち金そのものの役割であったが^{ix}、それ自体は売りと買いとの取引を媒介しては絶えず次々と売り手の側に持ち手をかえて移動・流通する（貨幣の流通）。諸取引を媒介しては次々と持ち手をかえて流通していき一箇所にとどまることなく一時的な存在にしか過ぎない通貨形態としては、信用貨幣である銀行券（紙券）にその機能を移し、こうして、金代理物としての（兌換）銀行券が金貨幣にかわる通貨機能を担うようになる。さらに金本位制の崩壊に伴う銀行券の兌換停止に伴って、かつて一定量の金量を直接代位していた兌換銀行券は、固定的な金量をあらわすことのない無価値な紙券、単に価値の標章に過ぎない不換銀行券（今日の銀行券＝「現金」）にとって替わるのである。

5 小切手の利用と商業手形の利用

また他方、相殺と振替・移転の制度的・技術的發展にともなう決済システムの発展とともに、流通手段である銀行券＝現金通貨は、取引当事者である買手自身が銀行にもつ自己の預金勘定（口座）宛に振り出す小切手の発行・流通によって代位されてきた。

小切手は、当座預金勘定を基礎とし、本来なら預金形態で蓄蔵されている貨幣資本の一部を現金＝銀行券で引き出して支払いに充てるべきところ、預金からの指定金額の支払指図書として、銀行券に代わるその代替的手段

として、通貨機能を果たしているのである。小切手の発行・流通は、預金額の存在を裏づけとして預金そのものではなくそのうちの小切手による指定金額だけが振り出されることによって当該取引の媒介物として通貨機能を果たしているのである。

その意味で小切手は銀行券と同じ現金通貨として通貨機能を果たしているのであって、小切手の還流によって振り替えられるある銀行預金の他の銀行預金への移転は、銀行券の銀行窓口での出入りとなんらかわるところはない。銀行券＝現金に代わる小切手の利用によって、通貨の流通における現金＝銀行券の利用が大きく節約され、逆に小切手の流通量が大きく増加してきたのである。

それでは、商業信用に基づく手形（約束手形）の利用、流通は小切手の利用とどのような相違があるだろうか。小切手の利用も約束手形の発行・流通も、現実の取引を媒介する限りでは双方とも同じく流通手段＝通貨として機能している。しかし、大きな相違点は、小切手の利用が銀行預金口座における貨幣の存在を前提し、その預金額＝貨幣資本額からの振替（支払）指図を表しているに過ぎないものであるのに対して手形は、すでに見たように、それ自体が貨幣資本をあらわしているとはいえ、基本的に貨幣形態にないことを前提しているのであり、支払い満期日までに売り手から購入した商品の販売による資金確保をあてにして、あるいは満期日までの他の何らかの方法による貨幣の確保をあてにした支払い約束証書である。手形は、実際の取引段階において、商品購入のための貨幣額＝貨幣資本が当の購買者のところに存在しないところに特徴があり、購買者自身が将来の支払い約束を表す手形を発行することによって、手形形態で支払を行い、販売された商品の価値は手形に移転している。その意味で手形は、商品価値の移転によって手形形態において貨幣資本を表していると言えるのである。銀行がこの手形割引（＝買取）によって貨幣の供給を行うのは、手形保有者からの依頼によって手形形態の貨幣資本額を預金形態に、現実の貨幣＝貨幣資本に置き換えるものであって、満期日以前に貨幣に転化させたいという依頼者の必要を満たしながら、他方、銀行はこれによって資金の運用を図っているのである。

商業信用と手形流通についてマルクスは次のように述べている。「商業が発展し、ただ流通だけを念頭において生産を行なう資本主義的生産様式が発展するにつれて、信用制度のこの自然発生的な基礎（商業信用＝引用者）は拡大され、一般化され、完成されて行く。だいたいにおいて貨幣はここではただ支払手段としてのみ機能する。すなわち、商品は、貨幣と引き換えにではなく書面での一定期日の支払約束と引き換えに売られる。この支払約

束をわれわれは簡単化のためにすべて手形という一般的な範疇のもとに総括することができる。このような手形は、満期支払日まではそれ自身が再び支払手段として流通する。そしてこれが本来の流通貨幣をなしている。このような手形は、最後に債権債務の相殺によって決済されるかぎりでは、絶対的に貨幣として機能する。なぜならば、その場合には貨幣への最終的転化は生じないからである。このような生産者や商人どうしのあいだの相互前貸が信用の本来の基礎をなしているように、その流通用具、手形は本来の信用貨幣すなわち銀行券などの基礎をなしている。この銀行券などは、金属貨幣なり国家紙幣なりの貨幣流通にもとづいているのではなく、手形流通にもとづいているのである。」^x。

おわりに

資本の運動は、常にその取引を媒介する通貨を必要とするが、その通貨の供給はこれまで見てきたように、商業信用および銀行信用によって、手形、小切手、銀行券によって担われてきた。吉田氏の本書は本来それ自体決済システムを取り上げた書であるが、その中で踏み込んで預金通貨および現金通貨について言及しており、金融の現状と仕組みを熟知している氏の書は格好の検討対象と、私には考えられた。

吉田氏は、金融システム内部の預金の振替移転とそれによる決済の仕組みとして、経済活動に対応した金融の仕組みとして、完全にバランスよく理解していたであろうと思われる。しかし、氏は、商業世界に視野を広げて現実の取引を媒介する流通手段＝通貨を、商品の貨幣への転化の多様性として理解すべきであった。その転化形態の一つであり、商品価値の転化形態としての商業手形に体现された貨幣資本としての側面・独自性を見てはいなかった。商業信用によって生み出される手形はそれ自体が貨幣額を体现しているが、満期日を迎えるまでは現実の貨幣形態になることはない。手形割引は手形形態における貨幣資本を現実の貨幣資本に転化させる。吉田氏としては、それでも銀行貸出はこのような割引を通じた資金をも預金として供給しているのだと主張するかもしれない。だが氏の主張は、相殺、振替、決済からのみ、いわば金融の狭い世界での氏の言う「ゼロサムゲーム」だけを見て、実態経済における自己増殖する資本の運動を総体として見ず、相殺された大部分の債権債務関係に反映されている経済取引とその拡大を見ないものである。実態経済において取引を媒介する流通手段＝通貨はまさに相殺されて見えなくなった取引をも媒介しているのである。【2008.5.11 稿】

【注】

- i 拙稿「吉田暁氏における「預金通貨」論の検討—現代通貨論研究（1）—」（2008.3、『金沢星稜大学論集』第41巻第3号）
- ii 吉田暁『決済システムと銀行・中央銀行』（2002、日本経済評論社）
- iii 同書、pp7-8

iv 同書、pi.

v 同上

vi カール・マルクス著『資本論』（マルクス＝エンゲルス全集版、国民文庫①）第一部第1編第3章 p204.

vii 同、p204.

viii 同、p204.

ix 同、p196.

x 同『資本論』（同、国民文庫⑦）第三部第5編第25章 pp150-151.

